

PROGRAM

ラフマニノフ: ピアノ協奏曲 第3番 二短調 op.30 ★ (約39分)

Sergei Rachmaninoff : Piano Concerto No. 3 in D minor, op. 30

第1楽章 アレグロ・マ・ノン・タント Allegro ma non tanto

第2楽章 インテルメッツォ : アダージョ Intermezzo : Adagio

第3楽章 フィナーレ: アッラ・ブレーヴェ Finale : Alla breve

— 休憩 (20分) — Intermission

シベリウス: 交響曲 第2番 二長調 op.43 (約40分)

Jean Sibelius : Symphony No. 2 in D major, op. 43

第1楽章 アレグレット Allegretto

第2楽章 テンポ・アンダンテ・マ・ルバート Tempo andante ma rubato

第3楽章 ヴィヴァーチッシモ Vivacissimo

第4楽章 フィナーレ: アレグロ・モデラート Finale : Allegro moderato

指揮: ガエタノ・デスピノーサ Gaetano d'Espinosa, Conductor

ピアノ: リーズ・ドウ・ラ・サール Lise de la Salle, Piano (★演奏曲)

管弦楽: 兵庫芸術文化センター管弦楽団 Hyogo Performing Arts Center Orchestra

2015 3/13(金)・14(土)・15(日) 3:00PM開演
兵庫県立芸術文化センター KOBELCO 大ホール

主催: 兵庫県、兵庫県立芸術文化センター

※演奏時間は目安となります。前後する可能性がありますのでご了承ください。

これさえ
見れば
わかる!

今回の聴きどころ

東条 碩夫(音楽評論家)

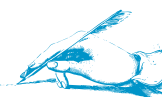
20世紀初頭に生まれた壮大な2つの名曲

複雑な音手法の、いわゆる「現代音楽」が生まれつつあった20世紀初頭——。だが、輝かしい19世紀ロマン派から受け継いだ伝統的な手法を発展させ、聴く人の心の奥底まで届く情感豊かな作品を書いた大作曲家もたくさんいた。

ラフマニノフとシベリウスも、そういった大作曲家たちのうちの巨人である。古今屈指のピアノの名手でもあったラフマニノフは、彼ならではの卓越したピアノのテクニックに、もって生まれたメロディストの才能を加えて、豪放磊落なピアノ協奏曲を書き上げた。いっぽう、北欧の巨人シベリウスは、持ち前の剛直な作風に、祖国フィンランドへの愛国の情熱をこめて、厳しい力に満ちた壮大な交響曲を生み出した。

今日ここに聴くのは、その2人の代表的名曲——ラフマニノフの「ピアノ協奏曲第3番」と、シベリウスの「交響曲第2番」である。

ライターおすすめ「必聴ポイント」



ラフマニノフ: ピアノ協奏曲 第3番 二短調 op.30

聴きものの第一は華麗なピアノ

ピアノ・パートの豪壮なテクニックは、20世紀最大のヴィルトゥオーゾ(名人主義的)ピアニストだった彼の面目躍如。第1楽章のソロの部分など、息もつかせぬ迫力だ。

シベリウス: 交響曲 第2番 二長調 op.43

厳しく雄大な、こわもての交響曲

北欧の厳しい冬の大自然、森と湖の国フィンランドの清澄な空気、幻想的な物語をもった壮大なカレワラの叙事詩——そうしたイメージを呼び起こす音楽が全曲を貫いている。

雄大な日没を見るような終楽章の頂点

終楽章の第1主題は、いちど聴いたら忘れられない。主題が堂々と復帰する再現部冒頭も見事な威容だ。そして木管群が波打ちながら盛り上がり、ゆくゆくは壮麗な終結部——。

PROGRAM NOTE

曲目解説——演奏をより深く楽しむために 東条 碩夫(音楽評論家)

ラフマニノフ:ピアノ協奏曲 第3番 二短調 op.30

初演:1909年11月28日ニューヨーク

20世紀屈指のピアニストが書いた協奏曲の名作

ラフマニノフが書いたピアノとオーケストラのための作品は5つ。うち、最後のものは「パガニーニの主題による狂詩曲」と題されているので、正規の「ピアノ協奏曲」は4曲ということになる。「第1番」は、モスクワ音楽院在学中の1891年(18歳)に完成された。最後の「第4番」は、1926年(53歳)の完成であった。いずれも後年に大改訂されたが、ただしこの2曲とも、めったに演奏されない。結局、彼のピアノ協奏曲の中では、最も有名なのが「第2番」(1901年完成)であり、それに次いでしばしば演奏され親しまれているのが、今日ここに聴く「第3番」ということになる。

この「第3番」が作曲された時期は、1907年から1909年にかけてだった。その頃、ラフマニノフは、一定の期間をドレスデンで過ごし、作曲に力を入れていた——「第2交響曲」「死の島」「ピアノ・ソナタ第1番」などの名作がここで書かれた。したがって「第3ピアノ協奏曲」は、彼の創作力がいちばん高揚していた時期の作品であることはたしかである。そして思えば、これに続く数年間のいわゆる「ロシア時代」が、ラフマニノフの作風にとっては、最高の充実期であったとも言えるのである。

そして彼は、1909年アメリカへ演奏旅行に出かけ、フィラデルフィア、ボストン、ニューヨークなどの大都市で、ピアニストとして、また時には指揮者として舞台に立った。この「第3ピアノ協奏曲」の初演が、彼自身のソロと、ダムロッシュ指揮のニューヨーク・フィルとの協演により行われたのも当然の成り行きだったであろう。ただしラフマニノフにとって、このアメリカ旅行は、あまり印象のいいものではなかったらしい。「聴衆は冷淡だ……新聞は私が(カーテンコールで)何度舞台に呼び出されたかということばかりを評価の尺度にしている」(注)。そのアメリカへのちに亡命することになるうとは、



当時36歳の彼には、予想もできなかったことだろう。

曲は、3つの楽章からなる。「第2番」のように、甘美な、だれもがいつぺんで覚えてしまうようなメロディはあまり登場せず、どちらかといえばゴツゴツした曲の作りではあるものの、それでも第1楽章冒頭で揺れ動く弦に乗って現われる第1主題は、いかにもラフマニノフそのものの音楽と言えるだろうし、美しい叙情性にもこと欠かない。だが、ダイナミックな起伏と迫力は、「第2番」に比べ、はるかに増している。野性的な第3楽章の、最後の豪壮華麗なクライマックスは、ラフマニノフの「もって行き方の巧さ」を感じさせる。最後に聴衆をワッと沸かせる術にかけては、彼は屈指の名人だった。

(注)バジャーノフ「ラフマニノフ」(小林久枝訳、音楽之友社)より自由に引用

楽器編成

独奏ピアノ、フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット2、トロンボーン2、バス・トロンボーン、テューバ、ティンパニ、大太鼓、シンバル、スネアドラム、弦楽5部

Profile

セルгей・ラフマニノフ (1873~1943)

近代ロシアが生んだ大作曲家のひとり。モスクワ音楽院に学び、初期にはリムスキー=コルサコフやチャイコフスキーの影響を受けた。22歳の作品「交響曲第1番」は酷評を受けたが、28歳の時に完成した「ピアノ協奏曲第2番」で圧倒的な評価を確立。ロシア革命を機に1917年祖国を離れ、北歐を経てアメリカに渡り、生涯を同国で送った。3曲の交響曲、4曲のピアノ協奏曲ほか作品多数。20世紀屈指のピアノの名手としても知られる。





シベリウス:交響曲 第2番 二長調 op.43

初演:1902年3月8日 ヘルシンキ

北欧の巨人が書いた豪壮雄大な交響曲

フィンランドの大叙事詩「カレワラ」に基づく「クレルヴォ交響曲」(1892年)、そして交響詩「エン・サガ(伝説)」(同)、「カレリア」の音楽(93年)、「4つの伝説曲」(95年)、交響詩「フィンランディア」(99年)、「第1交響曲」(同)——と民族色にあふれた大管弦楽曲を書きつづけてきたシベリウスは、その余勢を駆って、「第2交響曲」の作曲にとりかかった。それは1901年、イタリア旅行のさなかに書きはじめられたといわれ、1902年のはじめに完成された。

この曲の中に聞かれる一種の「明るさ」はそのイタリアの風光の影響によるものだ、と解説する人もいるが、しかしその見解は、いくら曲が二長調だとはいえ、にわかには信じがたく、また共鳴しがたいのではないか。むしろ楽想の基調は、やはり北欧の大自然を連想させる厳しいものであり、そこには「フィンランディア」と同じように、帝政ロシアの圧力の下にあった当時のフィンランド国民の忍従や苦悩、真の独立を求める不屈の民族意識が力強く脈打ち、激しい闘争から精神の勝利へ向かうドラマのようなものが感じられるように思われる。

いずれにせよこの「第2番」は、シベリウスの交響曲の中で、最も豪壮で、満々たる力感が率直に押し出された作品と言ってよいだろう。こののち、彼は交響曲を第7番まで書くことになるが、作風は次第に精緻せいちになり、多弁さを排したものになっていく。この「第2番」のようにダイナミックな構築を採る交響曲を書くことは、もはや二度となかったのである。

曲は、4つの楽章からなる。第1楽章と第2楽章では、静かな主題ほうこうと荒々しく咆哮する豪放な主題とが交錯し、特に後者では、寄せては返す大波のような起伏をもった曲想

が息詰まる緊張感を生み出して物凄い。第3楽章は、快速で荒々しい勢いをもった主題と、オーボエの哀愁に満ちた遅いテンポの主題とが交互に出現する。そして、その2度目に現われた哀愁の主題から、曲はそのまま移行してクレッシェンドを重ね、まるでベートーヴェンの「第5交響曲」と同じように、切れ目なしに壮大な第4楽章に突入していく。このフィナーレの冒頭の第1主題は、「勝利の歓呼」にたとえても、あながち見当はずれとは言えないだろう。ただし、その歓呼は、長くは続かない。時に不安が頭をもたげるように、翳りのある曲想が姿を見せる。最後のクライマックスは、長い長いクレッシェンドの結果に到達する、雄大な第1主題を中心とした大団円の世界——シベリウスがその全作品の中で聴かせた最初で最後の、息の長い巨大な終結である。

楽器編成

フルート2、オーボエ2、クラリネット2、バスーン2、ホルン4、トランペット3、トロンボーン2、バス・トロンボーン、チューバ、ティンパニ、弦楽5部

Profile

ジャン・シベリウス (1865~1957)

フィンランド最大の作曲家。若い頃には浪費癖と飲酒癖のため借金地獄に陥ったこともあるというエピソードの持主だが、祖国を愛し、国民的叙事詩などを素材とした作品や、「フィンランディア」など愛国精神の発露高揚に富んだ作品を数多く書き、国民楽派を代表する大作曲家となった。しかし64歳(1929年)以降は不思議にも全く新作を発表せず、フィンランドの国家的音楽家としての尊厳を一身に集めたまま、91歳で世を去った。

